

「生徒の非認知能力の育成」
ー生徒が『主語』の主体的な活動を通してー
[本校学校ホームページ研究へのリンク先](#)

1. 生徒が「主語」となる学びへ～主体性を育む土台としての自己肯定感～

本校では、非認知能力の育成を目指しています。そのために生徒が自ら考え、判断し、行動する「主体的な学び」の実現を目指しています。

しかし、生徒が主体的に行動するためには、まず「自分ならできる」「自分には価値がある」と感じる自己肯定感が大切です。

（講師講話より～7月下旬の校内研究）自己肯定感が低い状態では、「どうせ自分にはできない」「間違えたら恥ずかしい」と考え、挑戦することを避けてしまうことがあります。一方で、自己肯定が高まると、失敗を恐れずに挑戦し、自分の考えを表現することができるようになります。

心理学者ウィリアム・ジェームズの考え方を参考に、自己肯定感について、次のような公式にしました。

$$\text{自己肯定感} = \frac{\text{達成（実際の成績・成功）}}{\text{要求（自身の理想像＋他者の期待）}}$$

この式から分かるように、自己肯定感は「どれだけ成果を上げたか」だけで決まるものではありません。自分が求める姿や周囲からの期待が大きくなりすぎると、十分な力や成果があっても「自分はまだ足りない」と感じてしまいます。

2. 事例から学ぶ日頃の行動の振り返り～こんな行動をしていきましょう（避けましょう）。

事例Ⅰ 達成（分子の向上）を他人が妨げている様子
Aさん「Cさん、今日の発表すごく分かりやすかったね。説明が上手だったよ。」
Bさん「でも、あれくらい誰でもできるでしょ。Cさん最近ちょっと調子に乗ってない？」
教師「Bさん、もしかしたらCさんを否定したいのではなく、自分も認めてほしいという気持ちがあるのかな。」
Bさん「……自分も頑張っているところを見てほしかったのかもしれません。」



このようなこと誰にでも一度はありますよね。大人になってもあります。Bさんのように、友達の成功を素直に喜べない背景には、「自分も認められたい（嫉妬心）」という思いが隠れていることがあります。Aさんのように互いのよさを認め合うことは、自分自身の価値やより良い集団の形成にもつながります。

事例2 周囲からの期待（分母）が大きすぎる

教師「Dさんは友達から『勉強も運動もできてすごい』と言われているね。自分ではどう思う？」

Dさん「全然です。もっとできるようにならないと……。」

教師「どうしてそう思うの？」

Dさん「家では『あなたならもっとできる』と言われます。期待してくれているのは分かるけどできていない自分はダメなのかなと思うことがあります。」



高い期待値は成長の力になります。うちの子にはこうなってほしいという考え方が大きすぎる（お子様の価値観と大きく異なっている）とそのような事態を招きます。結果だけでなく、**努力や成長の過程を認めることが大切です**。「もっと頑張って」だけではなく、「ここまで努力したね」という言葉が自己肯定感を育てます。

事例3 一律の基準が自信を失わせる

教師「全員、このレベルまで完成させましょう。」

Eさん「頑張っているけれど、自分には難しいです。」

教師「みんな同じ条件だから、最後まで取り組もう。」

Eさん「どうせ頑張っても、みんなと同じにはできない……。」



全員を同じ基準で評価することは平等に見えます。しかし、生徒一人一人の力や成長の段階は異なります。個々に応じた目標設定や支援（※学習支援員など含む）を行うことで、「自分は成長できる」という実感につながります。主体性を育むためには、生徒にただ「自分から動きなさい」と求めるだけではなく、「やってみよう」と思える土台づくりが必要です。

3. 保護者のみなさまへ（学校と家庭が同じ方向を向くことで生徒の力は大きく伸びます。）

今号は、講師としてお越しいただいた際のテーマが自己肯定感でした。よって記事メインとしました。事例2のように、ご家庭での言葉かけは、お子さんにとって大きな影響を与えます。昔の感覚で、成果（完成度・点数）に目を向けがちです。私も子育て（小2・年中）中ですが、考えて発言すればよかったという場面が多々あります。事例3のように教師の声掛けも重要です。※学校支援員（教員の補助（授業・事務））が欠員となっております。紹介していただける方は、本校副校長までご連絡ください。よろしくお願いします。